

# 子どもの仲間関係と社会的行動特徴 に関する縦断的研究

前 田 健 一

(幼児心理研究室)

(平成9年9月30日受理)

## A longitudinal study of peer relations and characteristics of social behavior

Kenichi MAEDA

子どものソシオメトリック地位や仲間からの受容度は、仲間集団における現在の社会的適応状態を反映するだけでなく、将来の社会的適応問題をも予測することがわかってきた (Hymel & Rubin, 1985 ; Kupersmidt, Coie, & Dodge, 1990 ; Parker & Asher, 1987)。ソシオメトリック測度の予測力を検討した初期の研究では、青年期や大人時代に非行や精神病理学の問題を示す人が、子ども時代の仲間関係はどうであったかを調べる遡及的な縦断的研究 (たとえば, Cowen, Pederson, Babigian, Izzo, & Trost, 1973) が主流であった。しかし、最近では子どもの発達と共に、同一の子ども集団を一定の期間にわたって継続的に調査する追跡的な縦断的研究が報告され始めている (Hymel, Rubin, Rowden, & LeMare, 1990 ; 前田, 1995 b ; Vitaro, Gagnon, & Tremblay, 1990; Vitaro, Tremblay, Gagnon, & Boivin, 1992)。

Hymel, Rubin, Rowden, & LeMare (1990) は小2と小5の両時点においてソシオメトリック評定法, 社会的行動特徴に関する仲間知覚指名法や教師評定法を実施し, 各時点における測度間の同時的関連と同時に, 小2時点と小5時点間の縦断的関連を検討している。小2時点と小5時点間の同一測度における縦断的相関の結果によると, 仲間受容度では  $r = .56, p < .001$ , 仲間知覚の攻撃性では  $r = .44, p < .001$ , 仲間知覚の孤立性では  $r = .34, p < .001$  であった。また, 小2時点において攻撃性や孤立性が多い子どもほど, 小5時点における仲間受容度が低い関係 (順に  $r = -.26, p < .05$ ;  $r = -.39, p < .001$ ) にあった。逆に, 小2時点において仲間受容度の低い子どもほど, 小5時点における攻撃性や孤立性が多い関係 (順に  $r = -.37, p < .001$ ;  $r = -.39, p < .001$ ) にあった。さらに, 小5時点の孤独感が強い子どもほど, 小2時点の仲間受容度が低く ( $r = -.24, p < .05$ ), 小2時点の孤立性が高い ( $r = .26, p < .05$ ) 関係にあった。これらの結果は, 仲間受容度だけでなく, 攻撃性や孤立性のような社会的行動特徴が3年経過しても比較的安定していることを示している。同時に, 小2

時点の攻撃性や孤立性のような行動特徴から、小5時点の仲間受容度の低さ、あるいは孤独感がある程度予測できることを実証するものである。しかし、彼らの研究ではソシオメトリック評定法しか実施していないので、結果の分析も相関分析に留まっている。ソシオメトリック指名法を使用し、子どもを人気児や拒否児のような地位群に分類すれば、小2時点から小5時点にかけて同一地位を維持していた安定的な地位群の子ども、あるいは両時点間で地位変動を示した不安定な地位群の子どもの特徴を比較検討することができる。そこで本研究では、相関分析と同時に、安定的な地位維持群と不安定な地位変動群を構成し、これらの地位群間の比較を通して、社会的行動特徴の維持や変化パターンを明らかにする。

Vitaro, Tremblay, Gagnon, & Boivin (1992) は小1時点(1年目)と小2時点(2年目)の地位群分類の結果を組み合わせて、同一地位を維持した拒→拒群と平→平群および地位変動を示した拒→他群の3群を比較している。その結果、1年目では拒→拒群や拒→他群が平→平群よりもソシオメトリック平均評定値が有意に少なく、「クラスの邪魔をする」や「けんかをする」の社会的行動特徴が有意に多かった。また、2年目でも拒→拒群が拒→他群や平→平群よりもソシオメトリック平均評定値が有意に少なく、「けんかをする」の社会的行動特徴が有意に多かった。Vitaro, Gagnon, & Tremblay (1990) は幼稚園児時点(1年目)と小1時点(2年目)にかけて追跡し、拒→拒群と拒→他群の2群を比較している。その結果、1年目のソシオメトリック平均評定値や社会的行動特徴では両群間に有意差が見られなかったが、2年目では拒→拒群が拒→他群よりも「おもちゃを共有する」が有意に少なく、「けんかをする」や「クラスの邪魔をする」が有意に多かった。これら2つの研究は、拒否児の地位を維持した拒→拒群が攻撃的・妨害的な行動特徴を一貫して示し、仲間受容度も一貫して低いことを示すものである。しかし、これら2つの研究は拒否児に焦点を絞っているため、拒→拒群や拒→他群の行動特徴の持続や変化パターンが適応状態の良い人気児の地位を維持した人→人群や地位変動を示した人→他群の行動特徴の持続や変化パターンとどのように異なるのかを知ることができない。

前田(1995b)は研究Ⅰにおいて幼稚園の年中児時点(1年目)と年長児時点(2年目)、研究Ⅱでは幼稚園の年長児時点(1年目)と小1時点(2年目)の地位群を組み合わせて、両時点とも同一地位を維持した拒→拒群と人→人群、地位変動を示した他→拒群と他→人群を抽出し、平均児群と比較している。その結果、研究ⅠとⅡに共通して、2年目の孤独感は拒→拒群が最も多く、平均児群が中間で、人→人群が最も少なかった。研究Ⅰの2年目では拒→拒群の攻撃性が最も多く、平均児群が中間で、人→人群が最も少なかった。しかし、1年目の攻撃性では群間差が見られなかった。それに対して、社会的コンピテンスでは1年目から人→人群が最も多く、平均児群が中間で、拒→拒群が最も少なかった。研究Ⅱの結果は研究Ⅰと少し異なり、攻撃性は1年目から拒→拒群が最も多かった。これらの結果は、Vitaroらの研究と同様に、同一地位を維持した拒→拒群が攻撃性のような否定的行動特徴を示しやすいことを実証するものである。しかし、同じ1年の期間でも研究Ⅰの1年間よりも研究Ⅱの1年間の方が拒→拒群の攻撃性は1年目から多い可能性を示唆する。さらに、Vitaroらの研究では検討されていない人→人群の結果は、拒→拒群とは反対に社会的コンピテンスのような肯定的行動特徴を1年目から一貫して示しやすく、2年目の孤独感も少ないことを実証するものである。

本研究は、小2時点(1年目)から小4時点(3年目)にかけて約2年間の期間をはさんだ縦断的研究である。本研究では前田(1995b)の研究Ⅱよりも年長の小2時点を縦断的研究の

開始年齢とした。前田（1995b）の結果を参考にすると、本研究では拒→拒群の攻撃性や人→人群の社会的コンピテンスが1年目から最も多いのではないかと予想される。また、3年目の孤独感も拒→拒群が最も多く、平均児群が中間で、人→人群が最も少ないのではないかと予想される。本研究の第1目的は、前田（1995b）と同様に拒→拒群、他→拒群、人→人群、他→人群、平均児群、他→無群の6群を構成し、1年目と3年目の社会的行動特徴や3年目の孤独感を比較検討することを通して、これらの予想を検証することである。あわせて、1年目から3年目にかけて安定的な地位維持群と不安定な地位変動群の社会的行動特徴の維持や変化パターンを明らかにする。第2の目的は、相関分析を通して1年目と3年目のソシオメトリック地位得点や社会的行動特徴の同時的関連と縦断的関連を検討し、相関分析の先行研究結果（たとえば、Hymel, Rubin, Rowden, & LeMare, 1990）と比較することである。

## 方 法

**対象児** 小学2年生と小学4年生の両時点における調査データが揃っている子ども112名（男子56名+女子56名）を対象とした。小2時点の平均年齢と年齢範囲は8歳2か月（7歳7か月～8歳7か月）であり、小4時点の平均年齢と年齢範囲は10歳3か月（9歳9か月～10歳8か月）であった。彼らは、小2と小4の両時点とも3クラスの子どもたちであった。3クラスとも、小2から小4にかけてクラスは再編され、クラス集団の構成は変化している。

**手続き** 小2と小4の両時点とも、以下の調査は放課後の約1時間を利用して、各学年の3クラスとも同時間に平行してクラス単位で集団で実施した。調査者は各クラスとも女子大学生であった。調査の実施にあたっては最初に調査目的の要点を次のように説明した。「私たちは大学で子どもの友だち関係について研究しています。私たちは小学生の皆さんがいろんな人と友だちになるために、どんなことに気をつけているかを知りたくて、この調査をすることにしました。皆さんの答えは、全部一緒にまとめて分析します。だから、誰が誰のことを書いたか分からなくなります。また皆さんの答えは先生にも見せません。ですから、皆さんは自分の答えを誰かに見られる心配はありません。自分の思ったとおりに正直に答えて下さい。」この後、近くの友だちと見せ合ったり、相談しないように注意を与えて、調査を実施した。なお、調査にあたっては、どの質問についても当てはまる子がいない場合や記入したくない場合は書かなくてもよいことを十分に理解させてから、調査への協力を求めた。

(1)ソシオメトリック指名法：クラスの同性仲間全員の名簿を印刷した用紙を渡し、「クラスの中で一緒に遊びたい子」（肯定的指名）と「クラスの中で一緒に遊びたくない子」（否定的指名）をそれぞれ3名以内ずつ選択し、その仲間の名簿番号を回答欄に記入させた。

(2)ソシオメトリック評定法：「クラスの友だちとそれぞれどのくらい一緒に遊びたいと思うか」について、クラスの同性仲間全員を3段階で評定させた。

(3)仲間知覚指名法：表2に示す9項目の質問を印刷した用紙を見ながら、それぞれの質問に該当する同性仲間の名簿番号を小2時点では1名ずつ、小4時点では3名以内ずつ回答欄に記入させた。

(4)孤独感評定法：Asher & Wheeler (1985)を参考にして、表1に示す11項目を用意し、各項目について3段階で自己評定させた。孤独感評定法の実施にあたっては、まず最初に「あなたは、アイスクリームが好きですか」と「今日の朝ご飯はパンを食べましたか」の2つの質

問を実施し、回答の仕方を理解させた。また「お家ではテレビをたくさん見ますか」、「絵を描くのは好きですか」、「運動場で遊ぶのは好きですか」の3つの質問を表1の孤独感質問項目2または3項目ごとに挿入した。

**得点化の方法** (1)ソシオメトリック指名得点：まず対象児ごとに仲間か

ら受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。本人を除く同性仲間の人数は欠席などによりクラス間で多少異なり、17名～19名の範囲であった。したがって、各子どもの合計指名数は最小0～最大19の範囲にわたる。そこで、それぞれの合計指名数を本人を除く同性仲間数で除算し、仲間一人当りからの指名数を算出した。その後、同一学年の同性3クラスの平均値とSDに基づいて標準得点へ変換した。次に、この2つの標準得点（肯定的指名得点=L得点、否定的指名得点=D得点）から、社会的好み得点（SP得点=L-D）と社会的影響力得点（SI得点=L+D）を算出した。L得点は仲間から積極的に好かれる程度を表し、D得点は仲間から積極的に拒否される程度を表す。SP得点とSI得点はそれぞれL得点とD得点の合成得点である。

(2)ソシオメトリック平均評定値：対象児ごとに仲間から遊びたいと評定された程度に応じて1点～3点を配点し、同性仲間全員から受けた評定値を合計した。本人を除く同性仲間数は17名～19名の範囲であるから、評定値の合計得点は最小17点～最大57点の範囲にわたる。この合計得点を評定した同性仲間数で除算して仲間一人当りからの平均評定値を算出した。この平均評定値は数値が高いほど仲間から受容される程度が高いことを表す次元の指標である。平均評定値は同性仲間全員の評定に基づくので、肯定的指名や否定的指名の少ない無視児でも平均評定値は比較的高い場合がある（前田，1994；前田・片岡，1993）。

(3)仲間知覚項目得点：L得点と同様に、項目別に同性仲間一人当りからの指名数を求め、それを標準得点へ変換して各項目別の仲間知覚項目得点とした。

(4)仲間知覚尺度得点：仲間知覚項目得点に基づいて9項目に関する主因子分析を行った。表2の左の欄は小2時点のデータ（N=112）に基づく因子分析の結果から、直交バリマックス回転後の因子構造行列を示したものである。因子負荷量の絶対値が0.60以上の項目を見ると、第I因子は項目2，4，7の3項目から成っている。これら3項目はいずれも攻撃性に関連するので、第I因子を「攻撃性」因子と命名した。第II因子は項目3，5，9の3項目から成っている。これら3項目はいずれも社交性や友好性に関連しているので、第II因子を「社会的コンピテンス」因子と命名した。第III因子は項目1，6，8の3項目から成り、いずれも対人的消極性に関連しているので、第III因子を「引っ込み思案」因子と命名した。

同様に、表2の右の欄は小4時点のデータ（N=112）に基づく因子分析の結果から、直交バリマックス回転後の因子構造行列を示したものである。因子負荷量の絶対値が0.70以上の項

表1 孤独感の自己評定項目

項目	質問内容
(1)	小学校で、新しいお友達とすぐに仲良くなれますか。
(2)	小学校で、お話するお友達はいますか。
3	小学校で、一人ぼっちだと思いますか。
(4)	小学校で、お友達と仲良く遊んでいますか。
(5)	小学校では、たくさんお友達がいますか。
6	小学校では、お友達がなくて淋しいですか。
(7)	小学校で遊ぶとき、すぐに遊び友達が見つかりますか。
8	小学校で、仲良しの友達をつくるのは難しいですか。
9	小学校で、みんなから仲間はずれにされていると思いますか。
(10)	誰かに手伝ってほしいとき、頼めるお友達はいますか。
(11)	お友達は、あなたのことを好きだと思いますか。

( ) 付きの項目は得点の方向を逆にして得点化した。

表2 小2時点と小4時点における仲間知覚得点の因子分析 (N=112)

項目	質問内容	小2時点				小4時点			
		因子				因子			
		I	II	III	h <sup>2</sup>	I	II	III	h <sup>2</sup>
1.	自分からあまり話しかけない子	-.03	-.06	.75	.57	.88	-.10	.04	.79
2.	自分から言い争いやけんかをしかける子	.62	-.11	.08	.40	-.02	-.20	.78	.65
3.	たくさんの友達と仲良く遊ぶのが上手な子	-.10	.83	-.06	.70	-.13	.80	-.07	.66
4.	自分の思いどおりにならないと、すぐに怒る子	.99	-.10	.00	.98	.01	-.14	.86	.76
5.	友達に親切で、みんなのことをよく考える子	-.14	.72	.01	.54	.02	.76	-.18	.61
6.	おとなしくて、あまり目立ちたがらない子	-.05	.01	.70	.50	.91	-.05	-.21	.87
7.	他の子によく命令する子	.74	.12	-.12	.58	-.15	.08	.75	.59
8.	友達とあまり遊ぼうとしない子	.07	-.09	.78	.62	.86	-.09	-.03	.75
9.	みんなのリーダーとなって、友達をうまくまとめる子	.19	.83	-.10	.74	-.14	.98	.02	.98
	平方和	1.99	1.94	1.70	5.63	2.40	2.26	1.99	6.66
	寄与率	.221	.216	.189	.626	.267	.251	.221	.740

目を見ると、第I因子は項目1, 6, 8の3項目から成り、いずれも対人的消極性に関連しているため、第I因子を「引っ込み思案」因子と命名した。第II因子は項目3, 5, 9の3項目から成り、社交性や友好性に関連しているため、第II因子を「社会的コンピテンス」因子と命名した。第III因子は項目2, 4, 7の3項目から成り、いずれも攻撃性に関連するものであるため、第III因子を「攻撃性」因子と命名した。

小2時点と小4時点のそれぞれにおいて、対象児ごとに各因子を構成する3項目ずつの標準得点の平均値を算出し、それを学年別・性別に再度標準得点へ変換して攻撃性尺度（以下AG尺度と略す）、引っ込み思案尺度（以下WD尺度と略す）および社会的コンピテンス尺度（以下SC尺度と略す）の各得点を構成し、以下の分析で使用した。

(5)孤独感得点：11項目の自己評定値を加算し、その合計得点を孤独感得点とした。項目1, 2, 4, 5, 7, 10, 11は逆転項目であり、評定値3を1点、評定値2を2点、評定値1を3点へと変換して加算した。したがって、孤独感得点は11点～33点の範囲にわたり、高いほど孤独感が強いことを意味する。

**地位群の分類と群構成の方法** 地位群の分類は Coie & Dodge (1988) の分類方法に従った。小2と小4の両時点別に、L得点、D得点、SP得点およびSI得点に基づいて、各対象児を5つの地位群のいずれかに分類した。各地位群の分類基準は人気児群 (SP > 1, L > 0, D < 0)、拒否児群 (SP < -1, L < 0, D > 0)、平均児群 (-1 < SP < 1, -1 < SI < 1)、無視児群 (SI < -1, L < 0, D < 0)、敵味方児群 (SI > 1, L > 0, D > 0) であった。表3は、小2時点と小4時点の地位群分類の人数内訳を男女別に示したものである。表3に基づいて小2時点の地位と小4時点の地位を組み合わせて、次の6群を構成した。小4時点の人気児群の中で、小2時点でも人気児であった者を人→人群 (N=13)、その他の人気児を他→人群 (N=12) とした。同様に、小4時点の拒否児群の中で、小2時点でも拒否児で

あった者を拒→拒群 (N=12), その他の拒否児を他→拒群 (N=13) とした。平均児群 (N=29) は小4時点において平均児であった者から構成された。無視児群では両時点とも無視児の地位を維持

表3 小2時点と小4時点の地位群分類の人数内訳

小2時点の地位群	小4時点の地位群					計
	人気児	拒否児	平均児	無視児	敵味方児	
人気児	7(6)	2(0)	4(1)	2(2)	0(3)	15(12)
拒否児	2(0)	5(7)	6(2)	3(5)	0(0)	16(14)
平均児	1(4)	1(4)	2(9)	10(5)	1(1)	15(23)
無視児	3(2)	1(4)	4(1)	1(0)	0(0)	9(7)
敵味方児	0(0)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)
計	13(12)	10(15)	16(13)	16(12)	1(4)	56(56)

( )外の数 は男子の人数, ( )内 の数は女子の人数

した者が1名しかいなかったもので、他→無群 (N=27) だけを構成した。なお敵味方児群の人数は少なかったもので、群間比較の分析から除外したが、相関係数の算出にあたっては敵味方児群を含む全員のデータを使用した。

## 結 果

### 群間比較の結果

表4は、小2時点の得点別に6群の平均値とSDを示したものである。同様に、表5は小4時点の得点別に6群の平均値とSDを示したものである。以下の分析では、分散の群間等質性が保証されるときには1要因分散分析を適用した後、Duncan法を使用して各群間の差を検定した。分散の群間等質性が保証されないときにはWelch法を含むt検定を使用して、各群と平均児群間差、他→人群と人→人群間差および他→拒群と拒→拒群間差を検定し、その結果をまとめて報告する。

(1)小2時点のソシオメトリック得点：L得点では人→人群が平均児群や他→人群よりも有意に多く (ともに  $p < .001$ )、拒→拒群が他→拒群や平均児群よりも有意に少なかった (順に  $p < .02$ ,  $p < .001$ )。D得点では拒→拒群が平均児群や他→拒群よりも有意に多く (ともに  $p < .001$ )、人→人群が平均児群よりも有意に少なかった ( $p < .001$ )。SP得点では群の主効果が  $F(5, 100) = 15.37$ ,  $p < .001$  で有意となり、人→人群が他の5群よりも有意に多く (すべて  $p < .01$ )、拒→拒群が他の5群よりも有意に少なかった (すべて  $p < .01$ )。SI得点では群の主効果が  $F(5, 100) = 4.32$ ,  $p < .005$  で有意となり、拒→拒群が他→無群、平均児群、他→拒群、他→人群の4群よりも (順に  $p < .05$ ,  $p < .05$ ,  $p < .01$ ,  $p < .01$ )、人→人群が平均児群、他→拒群、他→人群の3群よりも (順に  $p < .05$ ,  $p < .01$ ,  $p < .01$ ) 有意に多かった。平均評定値では人→人群が平均児群や他→人群よりも有意に多く (ともに  $p < .001$ )、他→拒群や拒→拒群が平均児群よりも有意に少なかった (ともに  $p < .001$ )。しかし、他→拒群と拒→拒群間の差は有意でなかった。

(2)小2時点の仲間知覚尺度得点：AG尺度得点では拒→拒群が平均児群よりも有意に多く ( $p < .02$ )、人→人群が平均児群よりも有意に少なかった ( $p < .02$ )。SC尺度得点では人→人群が平均児群よりも有意に多く ( $p < .05$ )、他→無群が平均児群よりも有意に少なかった ( $p < .05$ )。WD尺度得点ではいずれの群間差も有意でなかった。

(3)小2時点の仲間知覚項目得点：項目1ではいずれの群間差も有意でなかった。項目2では

拒→拒群が平均児群よりも有意に多く ( $p < .05$ ), 人→人群が平均児群よりも有意に少なかった ( $p < .02$ )。項目3では拒→拒群が平均児群よりも有意に少なかった ( $p < .005$ )。項目4では拒→拒群が平均児群よりも有意に多かった ( $p < .05$ )。項目5ではいずれの群も平均児群と有意差がなかった。項目6ではいずれの群も平均児群と有意差がなかった。項目7では拒→拒群が平均児群よりも有意に多かった ( $p < .05$ )。項目8では人→人群が平均児群よりも有意に少なかった ( $p < .05$ )。項目9では人→人群が平均児群よりも有意に多かった ( $p < .05$ )。

(4)小4時点のソシオメトリック得点: L得点では他→人群や人→人群が平均児群よりも有意に多く (ともに  $p < .001$ ), 他→無群, 他→拒群および拒→拒群がそれぞれ平均児群よりも有意に少なかった (いずれも  $p < .001$ )。D得点では拒→拒群や他→拒群が平均児群よりも有意に多く (ともに  $p < .001$ ), 他→無群, 他→人群および人→人群がそれぞれ平均児群よりも有

表4 小2時点における各得点の群別平均値 (SD)

	他→人群 (N=12)	人→人群 (N=13)	他→拒群 (N=13)	拒→拒群 (N=12)	平均児群 (N=29)	他→無群 (N=27)
(1) 小2時点のソシオメトリック得点						
L得点	-0.33 (0.51)	1.24 (0.78)	-0.10 (1.01)	-0.93 (0.19)	-0.18 (0.78)	-0.07 (0.62)
D得点	-0.37 (0.66)	-0.66 (0.19)	-0.34 (0.67)	1.65 (1.26)	0.05 (0.92)	0.03 (0.86)
SP得点	0.04 (0.90)	1.90 (0.80)	0.24 (1.11)	-2.58 (1.33)	-0.23 (1.49)	-0.10 (1.31)
SI得点	-0.70 (0.76)	0.58 (0.80)	-0.44 (1.30)	0.72 (1.23)	-0.13 (0.83)	-0.04 (0.74)
平均 評定値	2.17 (0.24)	2.50 (0.15)	1.91 (0.15)	1.78 (0.21)	2.20 (0.29)	2.08 (0.30)
(2) 小2時点の仲間知覚尺度得点						
AG尺度	0.01 (0.86)	-0.44 (0.18)	0.20 (1.44)	1.40 (1.82)	-0.19 (0.46)	-0.21 (0.52)
SC尺度	-0.03 (0.63)	0.70 (1.09)	-0.03 (0.91)	-0.28 (0.36)	-0.11 (0.42)	-0.33 (0.28)
WD尺度	-0.06 (0.66)	-0.41 (0.32)	0.12 (0.85)	0.08 (1.31)	-0.09 (0.86)	0.39 (1.38)
(3) 小2時点の仲間知覚項目得点						
項目1	-0.25 (0.31)	-0.19 (0.50)	0.22 (0.97)	0.08 (1.10)	-0.12 (0.76)	0.38 (1.50)
項目2	0.09 (1.21)	-0.42 (0.25)	0.05 (1.01)	1.20 (1.79)	-0.05 (0.70)	-0.13 (0.69)
項目3	-0.20 (0.49)	0.65 (1.46)	-0.01 (0.94)	-0.47 (0.28)	0.04 (0.71)	-0.25 (0.49)
項目4	0.23 (1.07)	-0.39 (0.21)	0.15 (1.26)	1.20 (1.72)	-0.22 (0.62)	-0.18 (0.65)
項目5	0.48 (1.27)	0.36 (1.41)	-0.36 (0.86)	-0.22 (0.42)	-0.06 (0.56)	-0.31 (0.42)
項目6	0.07 (1.06)	-0.42 (0.37)	-0.18 (0.58)	-0.19 (0.71)	-0.07 (0.98)	0.46 (1.37)
項目7	-0.30 (0.21)	-0.30 (0.28)	0.33 (1.72)	1.17 (1.92)	-0.21 (0.39)	-0.23 (0.32)
項目8	0.01 (0.66)	-0.41 (0.26)	0.22 (0.94)	0.36 (1.11)	-0.04 (0.80)	0.13 (1.20)
項目9	-0.35 (0.18)	0.79 (1.63)	0.27 (1.16)	-0.05 (0.64)	-0.27 (0.41)	-0.30 (0.25)

意に少なかった（順に  $p < .01$ ,  $p < .05$ ,  $p < .02$ ）。S P 得点では他→人群や人→人群が平均児群よりも有意に多く（ともに  $p < .001$ ），他→無群，他→拒群および拒→拒群がそれぞれ平均児群よりも有意に少なかった（順に  $p < .01$ ,  $p < .001$ ,  $p < .001$ ）。また他→拒群や拒→拒群が他→無群よりも有意に少なかった（ともに  $p < .001$ ）。S I 得点では他→人群，拒→拒群，他→拒群，人→人群の4群が平均児群よりも有意に多く（拒→拒群 > 平均児群は  $p < .01$ ；他はすべて  $p < .001$ ），他→無群が平均児群よりも有意に少なかった（ $p < .001$ ）。平均評定値では群の主効果が  $F(5, 100) = 25.59$ ,  $p < .001$  で有意となり，他→人群や人→人群が他の4群よりも有意に多く，他→拒群や拒→拒群が他の4群よりも有意に少なかった（人→人群 > 平均児群は  $p < .05$ ；他はすべて  $p < .01$ ）。

(5)小4時点の仲間知覚尺度得点：AG尺度得点では拒→拒群や他→拒群が平均児群よりも有意に多かった（順に  $p < .001$ ,  $p < .01$ ）。S C 尺度得点では他→人群が平均児群よりも有意に多く（ $p < .05$ ），他→無群や拒→拒群が平均児群よりも有意に少なかった（順に  $p < .01$ ,  $p < .001$ ）。W D 尺度得点では他→無群が平均児群よりも有意に多かった（ $p < .05$ ）。

(6)小4時点の仲間知覚項目得点：項目1では他→無群が平均児群よりも有意に多かった（ $p < .05$ ）。項目2では拒→拒群や他→拒群が平均児群よりも有意に多かった（順に  $p < .002$ ,  $p < .01$ ）。項目3では他→人群や人→人群が平均児群よりも有意に多く（ともに  $p < .01$ ），他→無群や拒→拒群が平均児群よりも有意に少なかった（順に  $p < .005$ ,  $p < .001$ ）。項目4では拒→拒群や他→拒群が平均児群よりも有意に多かった（順に  $p < .005$ ,  $p < .01$ ）。項目5では他→無群，他→拒群，拒→拒群の3群が平均児群よりも有意に少なかった（順に  $p < .05$ ,  $p < .01$ ,  $p < .01$ ）。項目6では他→無群が平均児群よりも有意に多かった（ $p < .05$ ）。項目7では拒→拒群や他→拒群が平均児群よりも有意に多かった（順に  $p < .01$ ,  $p < .02$ ）。項目8では他→無群が平均児群よりも有意に多かった（ $p < .05$ ）。項目9では他→人群や人→人群が平均児群よりも有意に多く（順に  $p < .01$ ,  $p < .002$ ），他→無群や拒→拒群が平均児群よりも有意に少なかった（ともに  $p < .02$ ）。

(7)小4時点の孤独感得点：拒→拒群が平均児群や他→拒群よりも有意に多く（順に  $p < .05$ ,  $p < .02$ ），他→人群や人→人群が平均児群よりも有意に少なかった（順に  $p < .01$ ,  $p < .001$ ）。

(8)同一得点における各群の学年差：対応のある t 検定を使用して，得点別に各群の小2時点と小4時点の差を検定した。その結果，L 得点では他→人群の小4が小2よりも（ $p < .001$ ），他→拒群や他→無群の小2が小4よりも有意に多かった（順に  $p < .05$ ,  $p < .001$ ）。D 得点では他→拒群の小4が小2よりも（ $p < .001$ ），他→無群の小2が小4よりも有意に多かった（ $p < .005$ ）。S P 得点では他→人群の小4が小2よりも（ $p < .001$ ），他→拒群の小2が小4よりも有意に多かった（ $p < .001$ ）。S I 得点では他→人群や他→拒群の小4が小2よりも（順に  $p < .001$ ,  $p < .05$ ），他→無群の小2が小4よりも有意に多かった（ $p < .001$ ）。平均評定値では他→人群の小4が小2よりも有意に多かった（ $p < .001$ ）。

仲間知覚のAG尺度得点では他→無群の小2が小4よりも有意に多かった（ $p < .05$ ）。S C 尺度得点では他→人群と人→人群の小4が小2よりも（順に  $p < .01$ ,  $p < .05$ ），他→拒群，拒→拒群および他→無群の小2が小4よりも有意に多かった（順に  $p < .05$ ,  $p < .005$ ,  $p < .005$ ）。W D 尺度得点ではいずれの群でも学年差は有意でなかった。

仲間知覚の項目2では他→拒群の小4が小2よりも有意に多かった（ $p < .05$ ）。項目3では他→人群の小4が小2よりも（ $p < .005$ ），他→無群の小2が小4よりも有意に多かった（ $p$



表5 小4時点における各得点の群別平均値 (SD)

	他→人群 (N=12)	人→人群 (N=13)	他→拒群 (N=13)	拒→拒群 (N=12)	平均児群 (N=29)	他→無群 (N=27)
(1) 小4時点のソシオメトリック得点						
L得点	1.62 (0.84)	1.13 (0.53)	-0.75 (0.37)	-0.94 (0.28)	-0.06 (0.27)	-0.74 (0.35)
D得点	-0.62 (0.28)	-0.62 (0.22)	1.27 (0.68)	1.83 (1.26)	-0.33 (0.38)	-0.58 (0.26)
SP得点	2.24 (0.89)	1.76 (0.40)	-2.01 (0.83)	-2.76 (1.38)	0.26 (0.51)	-0.16 (0.58)
SI得点	1.00 (0.89)	0.51 (0.70)	0.53 (0.72)	0.89 (1.19)	-0.39 (0.42)	-1.32 (0.21)
平均 評定値	2.57 (0.19)	2.48 (0.19)	1.88 (0.27)	1.72 (0.17)	2.29 (0.25)	2.20 (0.23)
(2) 小4時点の仲間知覚尺度得点						
AG尺度	-0.48 (0.32)	-0.35 (0.54)	0.95 (1.32)	1.65 (1.28)	-0.34 (0.43)	-0.40 (0.36)
SC尺度	1.01 (1.26)	0.86 (1.99)	-0.47 (0.45)	-0.67 (0.19)	-0.07 (0.82)	-0.55 (0.27)
WD尺度	-0.28 (0.37)	-0.38 (0.22)	0.18 (1.38)	0.07 (0.87)	-0.29 (0.41)	0.36 (1.33)
(3) 小4時点の仲間知覚項目得点						
項目1	-0.39 (0.39)	-0.37 (0.30)	0.05 (1.10)	0.24 (1.23)	-0.28 (0.46)	0.33 (1.30)
項目2	-0.40 (0.49)	-0.38 (0.62)	0.82 (1.13)	1.61 (1.45)	-0.27 (0.54)	-0.34 (0.53)
項目3	0.83 (1.08)	0.75 (1.02)	-0.46 (0.44)	-0.66 (0.18)	-0.07 (0.74)	-0.56 (0.43)
項目4	-0.43 (0.34)	-0.38 (0.41)	0.80 (1.25)	1.62 (1.58)	-0.33 (0.47)	-0.32 (0.37)
項目5	0.71 (1.33)	0.55 (1.15)	-0.56 (0.36)	-0.59 (0.42)	0.10 (1.05)	-0.37 (0.42)
項目6	-0.07 (0.58)	-0.35 (0.25)	0.11 (1.19)	-0.22 (0.44)	-0.23 (0.40)	0.37 (1.44)
項目7	-0.41 (0.35)	-0.15 (0.73)	0.86 (1.43)	1.07 (1.40)	-0.28 (0.47)	-0.38 (0.41)
項目8	-0.31 (0.37)	-0.33 (0.25)	0.34 (1.11)	0.18 (0.98)	-0.29 (0.53)	0.29 (1.23)
項目9	1.15 (1.42)	1.01 (1.03)	-0.27 (0.58)	-0.56 (0.08)	-0.22 (0.66)	-0.54 (0.14)
(4) 小4時点の孤独感得点						
	13.33 (1.55)	12.54 (1.01)	14.15 (2.03)	20.25 (6.62)	15.59 (3.64)	16.56 (4.67)

<.05)。項目5では拒→拒群の小2が小4よりも有意に多かった ( $p < .05$ )。項目9では他→人群の小4が小2よりも ( $p < .01$ )、他→拒群、拒→拒群、他→無群の3群の小2が小4よりも有意に多かった (順に  $p < .05$ ,  $p < .02$ ,  $p < .001$ )。

### 相関分析の結果

(1)縦断的関連:表6は、小2時点と小4時点の得点間の縦断的関連を相関係数によって示したものである。同一得点同士の相関値を見ると、いずれも有意な正相関を示し、小2から小4にかけて子どものソシオメトリック得点や仲間知覚尺度得点の安定性は高いことがわかる。特

表6 各得点の小2時点と小4時点間の縦断的相関係数 (N=112)

小4時点	小2時点					
	指名得点		平均 評定値	仲間知覚尺度得点		
	L	D		AG	SC	WD
L	.354***	-.287**	.394***	-.172+	.321***	-.177+
D	-.237*	.362***	-.457***	.365***	-.024	.112
平均評定値	.353***	-.430***	.538***	-.386***	.207*	-.128
AG	-.173+	.399***	-.416***	.588***	-.026	-.031
SC	.345***	-.271**	.373***	-.155	.580***	-.125
WD	-.239*	.081	-.203*	-.101	-.100	.602***
孤独感	-.374***	.459***	-.424***	.177+	-.177+	.396***

+ : p &lt; .10 \* : p &lt; .05 \*\* : p &lt; .01 \*\*\* : p &lt; .001

表7 小2時点と小4時点における各得点間の同時的相関係数 (N=112)

	指名得点		平均 評定値	仲間知覚尺度得点		
	L	D		AG	SC	WD
L		-.439***	.613***	-.203*	.592***	-.248**
D	-.377***		-.598***	.629***	-.185+	.277**
平均評定値	.622***	-.713***		-.332***	.363***	-.285**
AG	-.277**	.760***	-.587***		-.047	-.022
SC	.650***	-.228*	.436***	-.166+		-.103
WD	-.298**	.123	-.218*	-.117	-.166+	
孤独感	-.351***	.177+	-.310**	.112	-.267**	.302**

+ : p &lt; .10 \* : p &lt; .05 \*\* : p &lt; .01 \*\*\* : p &lt; .001

右上側は小2時点, 左下側は小4時点

に、平均評定値を除くと、地位得点よりも、攻撃性、社会的コンピテンスおよび引っ込み思案のような社会的行動特徴の安定性が高いことがわかる。

(2)同時的関連：表7は、同一時点における各得点間の同時的関連を相関係数によって示したものである。表7から同時的相関パターンは、小2と小4間で極めて類似していることがわかる。相関値の大きさを比較すると、小2時点の方が小4時点よりも大きいのは、L得点とD得点間 ( $r = -.439$ )、D得点とWD尺度得点間 ( $r = .277$ ) および平均評定値とWD尺度得点間 ( $r = -.285$ ) の3つである。他の相関値はすべて小4時点の方が大きく、子どもの発達に伴って得点間の関連性が高くなっている。

(3)地位得点と仲間知覚項目得点の縦断的・同時的関連：表8は、小2時点と小4時点の地位得点としてL得点、D得点および平均評定値を選び、小2時点や小4時点の仲間知覚項目得点との相関係数を示したものである。L得点は社会的コンピテンスの項目(項目3, 5, 9)と有意な正相関を示し、D得点は攻撃性の項目(項目2, 4, 7)と有意な正相関を示しているが、この相関パターンは同時的相関値の方が縦断的相関値よりも高いことがわかる。

(4)仲間知覚項目得点の縦断的関連：表9は、仲間知覚項目得点について小2時点と小4時点間の縦断的関連を相関係数によって示したものである。同一項目同士の縦断的相関値は9項目すべてにおいて有意な正相関を示し、安定性が高いことがわかる。

表8 地位得点と仲間知覚項目得点との相関係数 (N=112)

	小2時点			小4時点		
	L得点	D得点	平均評定値	L得点	D得点	平均評定値
(1) 小2時点の仲間知覚項目得点						
項目1	-.208*	.217*	-.247**	-.212*	.099	-.138
項目2	-.281**	.639***	-.362***	-.138	.300**	-.295**
項目3	.630***	-.203*	.368***	.300**	-.052	.220*
項目4	-.219*	.566***	-.286**	-.148	.318***	-.345***
項目5	.375***	-.181+	.311**	.331***	-.065	.268**
項目6	-.152	.141	-.128	-.074	-.076	.028
項目7	-.021	.404***	-.203*	-.154	.317***	-.351***
項目8	-.268**	.357***	-.347***	-.169	.268**	-.225*
項目9	.530***	-.094	.261**	.212*	.053	.052
(2) 小4時点の仲間知覚項目得点						
項目1	-.239*	.163+	-.213*	-.295**	.182+	-.268**
項目2	-.248**	.470***	-.451***	-.307**	.708***	-.558***
項目3	.378***	-.279**	.366***	.667***	-.183+	.424***
項目4	-.223*	.405***	-.403***	-.316***	.713***	-.611***
項目5	.190*	-.179+	.290**	.422***	-.241*	.346***
項目6	-.204*	-.037	-.108	-.216*	-.041	-.077
項目7	.019	.166+	-.231*	-.101	.561***	-.363***
項目8	-.223*	.099	-.241*	-.314***	.197*	-.259**
項目9	.366***	-.270**	.349***	.667***	-.190*	.408***

+ : p < .10 \* : p < .05 \*\* : p < .01 \*\*\* : p < .001

表9 仲間知覚項目得点の縦断的相関係数 (N=112)

	小2時点の仲間知覚項目得点								
	項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9
小4時点の仲間知覚項目得点									
項目1	.630***	.012	-.154	-.018	-.107	.437***	-.074	.375***	-.045
項目2	-.005	.546***	-.101	.489***	-.193*	-.076	.393***	.187+	.034
項目3	-.192*	-.152	.448***	-.205*	.592***	-.082	-.035	-.157	.417***
項目4	-.004	.349***	-.130	.523***	-.138	-.030	.417***	.254**	.018
項目5	-.016	-.194*	.362***	-.235*	.576***	-.006	-.080	-.026	.328***
項目6	.655***	-.182+	-.122	-.157	.013	.511***	-.155	.260**	-.064
項目7	-.220*	.287**	.051	.353***	.053	-.196*	.566***	-.075	.225*
項目8	.550***	-.010	-.156	-.051	-.046	.453***	-.084	.365***	-.034
項目9	-.207*	-.095	.401***	-.120	.536***	-.051	.036	-.114	.451***

+ : p < .10 \* : p < .05 \*\* : p < .01 \*\*\* : p < .001

(5)仲間知覚項目得点の同時的関連：表10は、各時点における仲間知覚項目得点同士の同時的関連を相関係数によって示したものである。攻撃性の項目（項目2，4，7）同士，社会的コンピテンスの項目（項目3，5，9）同士，引っ込み思案の項目（項目1，6，8）同士の相関係数はそれぞれ有意な正相関を示し，同一尺度を構成する項目間の関連度が高いことがわかる。

表10 仲間知覚項目得点の同時的相関係数 (N=112)

項目1	項目2	項目3	項目4	項目5	項目6	項目7	項目8	項目9
項目1	-.026	-.108	-.010	-.059	.542***	-.077	.593***	-.097
項目2	.066	-.116	.637***	-.177+	.057	.428***	.151	-.017
項目3	-.197*	-.267**	-.174+	.627***	-.035	-.014	-.122	.676***
項目4	.067	.693***	-.170+	-.196*	-.070	.713***	.084	.089
項目5	-.056	-.252**	.610***	-.260**	.024	-.022	-.046	.561***
項目6	.795***	-.213*	-.146	-.167+	.018	-.129	.527***	-.064
項目7	-.143	.568***	.085	.638***	-.128	-.255**	-.084	.296**
項目8	.763***	-.028	-.178+	-.004	-.067	.801***	-.166+	-.158+
項目9	-.220*	-.170+	.784***	-.128	.751***	-.189*	.110	-.204*

+ :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$  \*\*\* :  $p < .001$   
 右上側は小2時点, 左下側は小4時点

## 考 察

まず表3から, 小4時点の地位を基準にして2年間をはさんだ同一地位の維持者率を求めると, 人→人群は52% (13/25), 拒→拒群は48% (12/25), 平→平群は38% (11/29), 無→無群は4% (1/28)となる。前田(1995b)の1年間をはさんだ地位維持者率を見ると, 幼稚園の年中児時点から年長児時点(研究I)では, 人→人群が35% (6/17), 拒→拒群が54% (7/13), 平→平群が22% (4/18), 無→無群が20% (2/10)であった。同様に, 幼稚園の年長児時点から小1時点(研究II)では, 人→人群が58% (7/12), 拒→拒群が45% (5/11), 平→平群が43% (10/23), 無→無群が10% (1/10)であった。本研究の無→無群の維持者率は前田(1995b)よりも少なく, 地位変動しやすいことを示しているが, 他の3群の維持者率は前田(1995b)の結果とほぼ一致する。これらの結果は, 本研究のように小2時点を縦断的研究の開始年齢とすると, たとえ2年間経過してクラスのメンバー構成が変化しても, 前田(1995b)の1年間の結果と同様に, 人気児や拒否児の地位が持続しやすいことを実証するものである。

本研究は小2時点を開始年齢とする縦断的研究であるので, 幼児期から小1時点を対象とした前田(1995b)の縦断的研究よりも, 安定的な地位維持群である拒→拒群の攻撃性や人→人群の社会的コンピテンスが1年目から最も多いのではないかと予想した。また, 3年目の孤独感も, 拒→拒群が最も多く, 平均児群が中間で, 人→人群が最も少ないのではないかと予想した。そこで社会的行動特徴に関する仲間知覚尺度得点の結果から, これらの予想について検討する。まず1年目(小2時点)の社会的行動特徴に関する群間比較の結果(表4参照)を見ると, 攻撃性は拒→拒群が最も多く, 平均児群が中間で, 人→人群が最も少なかった。さらに, 拒→拒群の攻撃性は3年目(小4時点)においても最も多かった。これらの結果は本研究の予想を支持するものであり, 拒→拒群のように拒否児の地位を持続させる子どもは, すでに1年目から攻撃性が強いと仲間から見られていることを示している。また, 小2の評価が小4の評価とかなり一致することは, 少なくとも攻撃性に関する小2の仲間評価の信頼性が高いことを示唆するものである。

1年目の社会的コンピテンスを見ると, 人→人群が最も多く, 平均児群が中間で, 拒→拒群

が少なかった（表4参照）。表5を見ると、この群間差は2年目の社会的コンピテンスでは一層顕著になっていることがわかる。事実、社会的コンピテンスの学年差を検討した結果、人→人群では小2から小4にかけて有意に増加しているのに対して、拒→拒群では小2から小4にかけて有意に減少していた。これらの結果も本研究の予想を支持するものである。攻撃性と社会的コンピテンスの結果を総合すると、人気児を維持する子どもは良好な仲間関係の中で社会的コンピテンスを高め、攻撃性を低下させる良循環を経験しているのに対して、拒否児を維持する子どもは攻撃性をますます強め、社会的コンピテンスの発達を促す機会を失うという悪循環を経験していると解釈される。なお、引っ込み思案は拒→拒群や人→人群を顕著に特色づける社会的行動特徴ではないようである。

予想どおり、小4時点（3年目）の孤独感は拒→拒群が最も多く、平均児群が中間で、他→人群や人→人群が最も少なかった。この結果は、前田（1995b）の研究Ⅰや研究Ⅱの結果とほぼ一致し、仲間から拒否され続ける拒→拒群は孤独感を最も強く感じ、仲間から受容され続ける人→人群は孤独感を感じる事が極めて少ないことを実証するものである。表4と表5からわかるように、拒→拒群の引っ込み思案傾向は小2時点でも小4時点でも、ほとんど平均値（標準得点0の値）に近い値を示している。したがって、拒→拒群の孤独感は拒→拒群が引っ込み思案傾向を示したり、自分から仲間との関係を敬遠することによるのではなく、仲間から拒否され続ける経験の中で次第に孤独感を感じるようになったと解釈するのが妥当であろう。

拒→拒群は孤独感を最も強く感じているのに、攻撃性は小2時点でも小4時点でも最も多く、攻撃性尺度得点（表4と表5を比較参照）を見る限り、小2時点から小4時点にかけて減少するよりも、むしろ増加する方向にあった。このことから、拒→拒群は自己の攻撃性が仲間からの拒否を招き、その累積的結果として孤独感を強めているという因果関係を自覚していないと考えられる。自己の社会的行動特徴を自覚しない傾向や自己の行動が他者に与える影響を考慮しない傾向は、拒→拒群だけに限定されるのか、あるいは小4の発達段階ではそれが一般的傾向なのかは今後の研究で明らかにしなければならない。いずれにしても、小4時点の拒→拒群では相変わらず攻撃性が多いことから、たとえ拒否される自己の地位やそれに伴う孤独感をある程度自覚していたとしても、それを改善するために自己の攻撃性を自発的に変容させようとしていないことは確かである。その意味では拒→拒群が最も社会的適応問題を抱えやすい群であり、教師や大人による介入指導を必要とする子どもたちであると考えられる。

次に、他→人群、他→拒群、他→無群の3群の社会的行動特徴の変化パターンについて検討する。これら3群は、いずれも1年目から3年目にかけて地位変動を示した不安定な地位変動群である。まず表4と表5を比較しながら、他→人群の攻撃性を見ると、統計的に有意ではないが、小2時点から小4時点にかけて低下していた。逆に、社会的コンピテンスは小2時点から小4時点にかけて有意に増加していた。しかし、引っ込み思案はほとんど変化していない。これらの結果から、小4時点において新たに人気児へと地位変動した他→人群は、社会的コンピテンスが増加すると共に、攻撃性がやや低下する変化パターンを示していると指摘できる。それに対して、他→拒群を見ると、攻撃性はやはり統計的に有意ではないが、小2時点から小4時点にかけて増加していた。逆に、社会的コンピテンスは小2時点から小4時点にかけて有意に減少していた。引っ込み思案はやはりほとんど変化していない。これらの結果から、小4時点において拒否児の地位へ変動した他→拒群は、他→人群とまったく反対の変化パターンを示していると指摘できる。最後に他→無群を見ると、小2時点から小4時点にかけて攻撃性が

有意に低下すると共に、社会的コンピテンスも有意に低下していた。しかし、引っ込み思案はほとんど変化していない。これらの結果から、他→無群は攻撃性と社会的コンピテンスの両方が低下する変化パターンを示していると言指できる。

以上の変化パターンをまとめると、他→人群では地位の向上が社会的コンピテンスの向上や攻撃性の低下と関連し、他→拒群では地位の低下が社会的コンピテンスの低下や攻撃性の増加と関連し、他→無群では社会的コンピテンスや攻撃性の低下と関連していることがわかる。これらの結果は、小4時点だけに焦点を当てると、同時期に地位と社会的行動特徴とを測定し、地位群間比較を行った従来の研究結果（たとえば、Coie, Dodge, & Kupersmidt, 1990; 前田, 1994, 1995 a; Newcomb, Bukowski, & Pattee, 1993）と一致している。ただし、これらの研究は縦断的研究ではないので、地位の変動パターンと社会的行動特徴の変化パターンの関連を検討できなかった。本研究の結果は、自発的な社会的行動特徴の変化パターンと地位の変動パターンの因果関係を決定するものではないが、少なくとも両変化パターンが一貫した関係にあることを実証するものである。大人による介入指導を実施する場合、仲間集団の中で占める地位を直接変化させることは極めて困難であるけれども、子どもの具体的な社会的行動を改善させるように働きかけることは比較的容易である。その意味で、本研究の縦断的变化パターンは、社会的行動の変容を通して社会的適応の改善を目指す社会的スキル訓練の実践的な考え方を支持するものである。

最後に相関分析の結果から、先行研究結果（たとえば、Hymel, Rubin, Rowden, & LeMare, 1990）と比較検討する。Hymel, Rubin, Rowden, & LeMare (1990) は小2時点と小5時点間の縦断的関連を検討し、仲間受容度では  $r = .56$ ,  $p < .001$ , 仲間知覚の攻撃性では  $r = .44$ ,  $p < .001$ , 仲間知覚の孤立性では  $r = .34$ ,  $p < .001$  を見出している。表6から、これに対応する本研究の縦断的相関値を取り出すと、仲間受容度（平均評定値）は  $r = .54$ ,  $p < .001$ , 仲間知覚の攻撃性は  $r = .59$ ,  $p < .001$ , 仲間知覚の引っ込み思案は  $r = .60$ ,  $p < .001$  である。仲間受容度の相関値は両研究間ではほぼ同程度であるが、攻撃性や引っ込み思案の相関値は本研究の方が大きい。これは、小2時点縦断的研究の開始年齢とする点で両研究は一致するが、期間の長さが本研究は2年間であるのに対して、彼らの研究は3年間であるという相違によるのかもしれない。

Hymel, Rubin, Rowden, & LeMare (1990) では、小2時点の攻撃性や孤立性が小5時点の仲間受容度と有意な負相関を示していた（順に  $r = -.26$ ,  $p < .05$ ;  $r = -.39$ ,  $p < .001$ ）。同様に、小2時点の仲間受容度は小5時点の攻撃性や孤立性と有意な負相関を示していた（順に  $r = -.37$ ,  $p < .001$ ;  $r = -.39$ ,  $p < .001$ ）。また、小5時点の孤独感も小2時点の仲間受容度と有意な負相関（ $r = -.24$ ,  $p < .05$ ）を示し、小2時点の孤立性と有意な正相関（ $r = .26$ ,  $p < .05$ ）を示していた。これらに対応する本研究の相関値を取り出すと、小2の攻撃性と小4の仲間受容度間で  $r = -.39$  ( $p < .001$ )、小2の引っ込み思案と小4の仲間受容度間で  $r = -.13$  (n.s.) である。同様に、小2の仲間受容度と小4の攻撃性間で  $r = -.42$  ( $p < .001$ )、小2の仲間受容度と小4の引っ込み思案間で  $r = -.20$  ( $p < .05$ ) である。また、小4の孤独感と小2の仲間受容度間で  $r = -.42$  ( $p < .001$ )、小4の孤独感と小2の引っ込み思案間で  $r = .40$  ( $p < .001$ ) である。小2または小4の引っ込み思案と小4または小2の仲間受容度との相関値は、いずれも本研究の方が低い、その他はすべて本研究の方が高い値を示している。特に、小4の孤独感と小2の引っ込み思案との相関値は本研究の方が高いことから、

Hymel, Rubin, Rowden, & LeMare (1990) と本研究の相関値の相違は期間の長さによるだけでなく、孤立性と引っ込み思案の項目内容の相違によるところが大きいと考えられる。

Hymel, Rubin, Rowden, & LeMare (1990) は改訂クラス・プレイ尺度 (Masten, Morison, & Pellegrini, 1985) の孤立性下位尺度を使用している。この下位尺度は7項目から成るが、その中には「恥ずかしがり」などの引っ込み思案項目と同時に、「自分の言うことを他の子どもに聞いてもらえない」や「取り残されることが多い」など拒否の結果から生じると思われる孤立性を捉える項目、あるいは「すぐに感情を傷つけられやすい」などの過敏性項目が含まれている。それに対して、本研究の引っ込み思案項目は対人的消極性を代表する3項目から構成されている(表2参照)。彼らの孤立性下位尺度は仲間拒否に関連する項目や過敏性の項目などを含んでいたため、仲間受容度と負の相関を示しやすかったのではないかと考えられる。あるいは、アメリカ社会では過敏性や引っ込み思案は子どもの発達と共に否定的な特性と考えられやすいのに対して、日本社会では引っ込み思案はあまり否定的な特性とは見られず、比較的許容されやすい。このような子ども集団や社会の価値観や規範における文化的相違も、本研究の引っ込み思案と仲間受容度との相関値を低くしている原因なのかもしれない。本研究の群間比較の結果によると、引っ込み思案は各群を区別する顕著な特徴ではなかった。したがって、引っ込み思案傾向を示す子どもが特定の群に集中している可能性は少ない。しかし、小2の引っ込み思案が小4の孤独感と有意な正相関を示すこと、さらに引っ込み思案の縦断的相関値は  $r = .60$  ( $p < .001$ ) と高いことを考慮すると、特定の子どもの引っ込み思案傾向は小2から小4にかけて一貫しており、これらの子どもは自分から仲間に働きかけることが少ないが、仲間関係を求めているわけではないことが推察される。引っ込み思案は攻撃性ほど仲間から目立つ特徴ではないので、研究結果の一貫性も乏しい。引っ込み思案の子どもの社会的適応問題について明確な結論を下すためには、日本の子どもに関する多くの研究結果を集積する必要がある。

## 要 約

本研究は、小2から小4にかけての2年間をはさんだ縦断的研究である。小2時点においてソシオメトリック指名法、評定法および社会的行動特徴に関する仲間知覚指名法を実施し、2年後の小4時点ではこれらの調査に加えて、孤独感の自己評定法を実施した。両測定時点のデータが揃っている子ども112名(男子56名と女子56名)の中から、2年間をはさんで安定的な地位を維持した群(拒→拒群, 人→人群), 不安定な地位変動群(他→人群, 他→拒群, 他→無群)および平均児群の6群を構成し、社会的行動特徴の維持や変化パターンについて比較検討した。また、112名全員のデータに基づいて相関分析を行い、地位得点、社会的行動特徴および孤独感の縦断的関連と同時的関連を検討した。主な結果は以下のとおりであった。

①2年間をはさんだ同一地位の維持者率は、人→人群(52%)が最も高く、拒→拒群(48%), 平→平群(38%)と続き、無→無群(4%)は最も低く、地位変動しやすい。

②攻撃性では、小2時点からすでに拒→拒群が最も多く、平均児群が中間で、人→人群が最も少なかった。小4時点でも拒→拒群の攻撃性は最も多く、攻撃性を一貫して示すと仲間から見られていた。

③社会的コンピテンスでは、小2時点からすでに人→人群が最も多く、平均児群が中間で、

拒→拒群が少なかった。小4時点になると、これらの群間差は一層顕著になった。また、小2時点から小4時点にかけて、人→人群の社会的コンピテンスは有意に増加したが、拒→拒群では有意に減少した。

④引っ込み思案では、小2時点でも小4時点でも顕著な群間差は見られず、拒→拒群や人→人群を特色づける社会的行動特徴ではなかった。

⑤孤独感でも予想どおり、拒→拒群が最も多く、平均児群が中間で、他→人群や人→人群が最も少なかった。

⑥他→人群では社会的コンピテンスが向上し、攻撃性が低下する変化パターンを示したが、他→拒群では逆に社会的コンピテンスが低下し、攻撃性が増加する変化パターンを示した。さらに、他→無群では社会的コンピテンスも攻撃性も低下する変化パターンを示し、3つの不安定な地位変動群における社会的行動特徴の変化パターンはそれぞれ異なっていた。

⑦同一得点の縦断的相関では、地位得点の安定性よりも、攻撃性、社会的コンピテンスおよび引っ込み思案の3つの社会的行動特徴の安定性が高く、子どもの行動特徴は一貫しやすく、変化しにくいことを示した。

⑧地位得点と社会的行動特徴との同時的関連では、L得点は社会的コンピテンスと有意な正相関を示したが、D得点は攻撃性と有意な正相関を示した。また、平均評定値は3つの社会的行動特徴のいずれとも有意な相関パターンを示した。

#### 引用文献

- Asher, S. R., & Wheeler, V. A. 1985 Children's loneliness: A comparison of rejected and neglected peer status. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53, 500-505.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school: A Cross-age comparison. *Child Development*, 59, 815-829.
- Coie, J. D., Dodge, K. A., & Kupersmidt, J. B. 1990 Peer group behavior and social status. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp. 17-59. Cambridge: Cambridge University Press. 山崎 晃・中澤 潤 (監訳) 1996 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否するところ— pp. 14-62. 北大路書房
- Cowen, E. L., Pederson, A., Babigian, H., Izzo, L. D., & Trost, M. A. 1973 Long-term follow-up of early detected vulnerable children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 41, 438-446.
- Hymel, S., & Rubin, K. H. 1985 Children with peer relationship and social skills problems: Conceptual, methodological, and developmental issues. In G. J. Whitehurst (Ed.), *Annals of child development*. Vol. 2, pp. 251-297. Greenwich: JAI Press.
- Hymel, S., Rubin, K. H., Rowden, L., & LeMare, L. 1990 Children's peer relationships: Longitudinal prediction of internalizing and externalizing problems from middle to late childhood. *Child Development*, 61, 2004-2021.
- Kupersmidt, J. B., Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1990 The role of poor peer relationships in the development of disorder. In S. R. Asher & J. D. Coie (Eds.), *Peer rejection in childhood*. pp. 274-305. Cambridge: Cambridge University Press. 山崎 晃・中澤 潤 (監訳) 1996 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否するところ— pp. 264-293. 北大路書房
- 前田健一 1994 幼児の仲間関係に関する研究—社会的行動特徴に関する仲間・実習生アセスメントの地位群間比較と下位群間比較— 愛媛大学教育学部紀要 第I部教育科学 41, 1, 71-88.
- 前田健一 1995 a 児童期の仲間関係と孤独感：攻撃性、引っ込み思案および社会的コンピテンスに関する仲間知覚と自己知覚 教育心理学研究, 43, 156-166.



- 前田健一 1995b 仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究 教育心理学研究 43, 256-265.
- 前田健一・片岡美菜子 1993 幼児の社会的地位と社会的行動特徴に関する仲間・実習生・教師アセスメント 教育心理学研究, 41, 152-160.
- Masten, A. S., Morison, P., & Pellegrini, D. S. 1985 A revised class play method of peer assessment. *Developmental Psychology*, 21, 523-533.
- Newcomb, A. F., Bukowski, W. M., & Pattee, L. 1993 Children's peer relations: A meta-analytic review of popular, rejected, neglected, controversial, and average sociometric status. *Psychological Bulletin*, 113, 99-128.
- Parker, J. G., & Asher, S. R. 1987 Peer relations and later personal adjustment: Are low-accepted children at risk? *Psychological Bulletin*, 102, 357-389.
- Vitaro, F., Gagnon, C., & Tremblay, R. E. 1990 Predicting stable peer rejection from kindergarten to grade one. *Journal of Clinical Child Psychology*, 19, 257-264.
- Vitaro, F., Tremblay, R. E., Gagnon, C., & Boivin, M. 1992 Peer rejection from kindergarten to grade 2: Outcomes, correlates, and prediction. *Merrill-Palmer Quarterly*, 38, 382-400.

付記 本研究の実施にあたり快くご協力下さいました愛媛大学教育学部附属小学校の先生方並びに児童の皆さんに心からお礼申し上げます。また、資料収集と整理にあたって援助いただいた女子大学生の皆さんに感謝申し上げます。本研究の一部は文部省科学研究費補助金（平成8年度～平成10年度）基盤研究C2 課題番号08610135の援助によるものである。